



①着工前の御大師堂外観※正面に突き出た参詣のための部分を向拝（こうはい）と呼びます（本文掲載）。 ②茅葺屋根の解体作業状況。 ③小屋組の解体中の様子。 ④須弥壇の羽目板に施された彫刻（天正9年〔1581〕の作）。

はじめに

現在、下里御大師堂では経年による劣化や破損が顕著であったことから、総ての部材を一旦解体して、修理を行い組み直す、解体修理工事を行っています。令和3年春より工事着手し、昨年度は解体、部材の修理、基礎工事、軸部組立までを完了し、今年度は引き続き、天井・床板・壁板・廻り縁・向拝の組立や耐震補強工事のほか、茅葺屋根、向拝瓦の製作と施工、須弥壇・厨子の組立など、完成を目指します。また、保存修理のほか、防犯・防火機能を備えるための設備工事の準備も進めています。

本稿では文化財修理についてのご紹介と、本工事で明らかになったこの建物の歴史について、簡単にご紹介させていただきます。

工事の内容

解体（分解）工事に先駆けて、悪天時でも安全に作業を行い、文化財を汚損させないための足場と素屋根の組立を行いました。これは文化財修理現場ならではの光景かもしれません。解体するすべての部材には、名称や位置を示す番付札を取り付けてから、解体します。柱一本から、板1枚、木端の一つにおいても、元あった場所

が分かるように記録しながら解体していきました。創建時に使用された図面などは、もちろん残っていませんので、部材の詳細な実測を行い、当初の建築計画を考察し、図化する作業も同時に行っていきます。その他にも、蟻害や腐朽などの破損状況、樹種、部材の時代判定、改変の履歴、墨書などについて、入念に記録を行います。

解体した部材は、可能な限り再使用することを努めます。そのため、材は継ぎ接ぎだらけになってしまい、見栄えが悪いと感じる人もいるかもしれません。しかし、文化財修理においては、創建当初の部材をいかに後世に残すかに重きが置かれます。近年では、創建後の修理や改変の際に付け加えられた部材についても、その建物の来歴を示すものとして、安易に取り替えないようになりました。当初の形式に戻す場合には、有識者等で組織する検討委員会などの承認を得て行います。そのために多くの時間と、労力を費やす必要があります。

組立については、基本は従来の工法でもとの形に戻しますが、耐震診断で耐震性の不足が確認されたので、耐震補強工事を行います。また、火災等で文化財が焼失しないよう、火災報知機の設置や防犯装置、初期消火体制を拡充させるための設備工事なども計画しています。

ただ、それだけでは、完全な保存修理とは言えません。堂内には多くの、修理年代やそこに関わってきた人々の名を示す札が保管されていました。小屋裏に雨漏りの痕跡がほとんど見られないので、たゆみなく人の手に加え続けられてきたことが判ります。定期的なメンテナンスに繋がるのは、そこに関わる人たちの愛着があつてこそで、それは文化財保護の原点なのかもしれません。



調査で明らかになったこと

・御大師堂の創建は延宝4年(1676)

これまで、このお堂の創建年代を示す史料などは確認されていませんでした。その建築様式から中世末期～江戸初期頃と推定はされていましたが、柱の溝の中に確認された「延宝四年二月二日・・・奈須久左門衛 右田茂兵衛」を筆頭に、部材の各所で同年を示す墨書が確認されました。一つの建物で、これほど多くの創建時期を記してあるのも珍しく、当時の職人さん達は実に親切(?)な人だったのかもしれません。



・向拝は当初からあった?

向拝とは、お堂の正面に差し出された参詣者のための屋根部分ですが、これは創建以降の後付けのものと考えられていました。部材の解体中に、明治初期まで使用されていた手打ちの釘(和釘・角釘などと呼ばれます)が確認されたことと、部材に残る墨書により少なくとも幕末までには設けられた可能性が高いことが判りました。その後、木材の放射性炭素年代法などの科学的調査や、部材の痕跡調査によって、創建当初から備わっていたものと結論付けられました。現状の屋根材は瓦ですが、当初は割板を葺き重ねた板葺の類であったと推測されます。本工事では、発掘された瓦や古写真を参考にして、近世以



写真(左)_墓股に遺された角釘。

写真(右)_向拝の虹梁仕口内に記された墨書。関係者の中に大工の名前も確認できる。

降の瓦屋根の形式に整備することとなりました。

・木材を大切にする文化

このお堂の建設に際して、非常に多くの転用材が用いられていることが判りました。転用材とは、別の建物を解体した際に生じる古材を再加工して用いた材で、通常は目立たない場所などに用いられますが、ここでは廻縁などの目立つ部分に使用されているのが特徴的です。転用材の材積数を調査したところ、全体の3割以上を占めることが判りました。部材に残る柱の穴の位置などからは、青蓮寺に相当するような五間堂規模の建物であった可能性が判ります。また、年代測定調査を行った結果、高い確率で15世紀中頃を示す結果が得られました。前身建物と御大師堂との関係性、当時の社会情勢など興味が尽きません。

・落書き?恋文?

創建年代を示す墨書の他に、多数の墨書が確認されました。特に、天井格縁や垂木などの屋根材に多く残っていました。その理由として、これらの部材の角を墨で塗装する「墨差し」が行われていて、その作業の傍ら、思い思いに塗師さんたちが筆を走らせたようです。特に度々登場する文言に、自身の名前と共に「あら御こいしやは百げさ上」と、意中の人への思いの丈を綴ったものがありました。果たして、この思いが成就したのか、気になりますね。



写真_垂木上面に残る墨書



さいごに

御大師堂修理事業では引き続き、時代考察等を補完できるような昔の資料を捜しています。タンスの中に眠っている古い写真や、思い出話などがございましたら、ぜひお寄せいただけますと幸いです。また、コロナで中断をしていた見学会を近く予定しています。詳細が決まり次第、広報・HP等でお知らせいたしますので、今しか見られない貴重な姿をぜひ見に来て下さい。



写真_古写真(湯前町史)



株式会社 文化財保存計画協会
Japan Cultural Heritage Consultancy

研究員_武田 学